The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言の談話マーカ「ホレ・ホリャ；アレ・アリャ」
Author(s)	渋谷，勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート．2002，4，p．131-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第4号（2002年3月）131-142

山形市方言の談話マーカ「ホレ・ホリャ；アレ・アリャ」

渋谷 勝己

【キーワード】山形市方言、ホレ、ホリャ、アレ、アリャ

【要旨】

本稿は、山形市方言に見られる談話マーカ「ホレ・ホリャ」「アレ・アリャ・リャ」を取り上げて、その談話的な機能を分析することを試みる。その特徴をまとめると、次のようになる。

(a) 山形市方言には、一種の談話マーカとして、ホレ・ホリャおよびアレ・アリャ（>リャ）といった形式がある。リャ以外は文頭・文中・文末いずれにも現れる。リャは文頭以外に現れる。

(b) ホレとホリャは、話し手が聞き手の注意や認識・記憶を喚起しようとする場合や、聞き手に行為を促す場合に用いられる。

(c) 独立形式のアレは、事態の生起に対する驚きを表す場合と、指示詞として話し手の記憶や聞き手との共有情報を指し示す場合がある。一方独立形式のアリャには、前者の用法はあるが、後者の用法はない。ただし聞き手の記憶を喚起するために、指示的に使われる場合がある。

(d) 従属形式としてのアレ・アリャ（さらにリャ）は、基本的に、独立形式のアレ・アリャの用法を引き継いでいる。

(e) ホレと指示的に使われた場合のアレの違いについては、ホレが、聞き手が（話し手と経験を共有していても）気づいていないことに注意を求める形式であるのに対して、アレは、話し手のみの経験、あるいは話し手と聞き手が共有している経験や知識を前提として指し示すものである。

(f) ホリャと指示的なアリャについても、同様のことが言える。

(g) ホレとホリャの間には、ホリャがハを抱合しているといった意味・機能上の違いが観察されるが、アレとアリャの間にはそのような違いはあまり観察されない。

1. はじめに

山形市方言には、共通語と同じように、

(1)	a	コレ	ホレ	アレ	ドレ	(これ	それ	あれ	どれ)
	b	コイヅ	ホイヅ	アイヅ	ドイヅ	(こいつ	そいつ	あいつ	どいつ)
	c	ココ	ホコ	アソコ	ドコ	(ここ	そこ	あそこ	どこ)

といった、コホアドの系列の指示詞がある（ホイヅのみハイヅとも言うことがある）*。このうちa系列の形式は、現場指示・文脈指示いずれの用法でもあまり使われることはない

が（この用法ではb系列が使われるのがふつう）[1]、聞き手への会話の持ちかけ方を操作する談話マーカとしては、コレとドレを除いて盛んに使われている（ドレには確認要求用法があることについては、渋谷2001で述べた）。文頭、文中、文末すべてに現れることがある。

(2) マメ　マグナナ　チェッチャエナ　マダ　エッヅダッス　ホレ。ホンーテ　ショッデンナ　ミナ　ワラザエグデバリ　シテ　ホレ　マンニャワシェッダナヅア　ホレ　ヒャクショノ　ドーグワナヤ。ミヌダテ　スケナクテ　シトリチャ　ホレ　シタッツヅヅワ　ツグランナネケッス　ホレ。

（そう　豆〔を〕　まくのなど〔は〕　小さいの〔が〕　また　必要だし　な。ほんとに　昔は　〔なんでも〕みな　藁細工でばかり　作って　ほれ　間に合わせていたんだよな　百姓の　道具はな。蓑だって　少なくっても　一人に　ほれ　二つずつは　作らねばならなかったし：国立国語研究所1978:25）

(3) シテ　アダーナ　オモダエナ。バゲヅナテ　ナエケッスアレ　テオゲデ。

（そして　あんなに　重たいの。バケツなんて　なかったしね　手桶で：国立国語研究所1978:34）

a系列の形式はまた、間投助詞・文末詞のハと融合して（コリャ・）ホリャ・アリャのかたちをとり[2]、同じく談話マーカとして使用されることがある。このうちアリャにはさらに、アが脱落し、リャという従属形式になって、間投助詞化あるいは文末詞化しているとみなされる場合がある。

本稿では、談話マーカあるいは間投助詞・文末詞として使われる（コレ・）ホレ・アレ、（コリャ・）ホリャ・アリャを取り上げて、その談話管理面での機能を記述することを試みる。

2. 記述の方法

本稿で取り上げるのは談話のなかでなかば無意識に使用される談話マーカであるので、ここでは、それが自然に使われている談話資料を主なデータとして使用し、これに筆者の内省を加えて分析をすすめることにする。

使用した談話資料は国立国語研究所（1978）である。これは山形県河北町谷地方言の老年層の談話データであるが（矢作春樹氏収集文字化）、筆者の内省によれば、この談話に現れる当該形式の意味・用法は、山形市方言の活躍層のそれと大きな違いはないと思われる（違いがある場合には、関係箇所で言及する）。ちなみに筆者は、1959年山形市生まれ。言語形成期を含め、18歳までを当地ですごしたあと、24歳まで東京に居住し、一年間の海外生活をはさんで現在まで大阪府に住んでいる。山形市には、現在も、一・二年に一度帰省することがある。

なお、本稿では、例について、国立国語研究所（1978）を引用する場合には、同書にし

たがって全発話をカタカナで記す。例の最後の数字はその例の掲載ページ、共通語の対訳も同書のものである。わかりやすさのため、ホレ・アレ等、談話のなかで問題とする形式を□で囲んで示し、その対訳部分を点下線で示した。引用にあたって、鼻濁音の表記やあいづち部分を省くなど、一部変更したところがある。

筆者の内省による作例については、議論に関連する形式のみをカタカナで記し、他は理解の便を考えて共通語で記す。

以下、国立国語研究所（1978）における当該形式の用例数の分布を整理し、これらの形式がどのような頻度をもって談話のなかに現れるかを確認する（第3節）。続いて第4節および第5節で、ホレ・ホリャ（第4節）、アレ・アリャ・リャ（第5節）の談話的なはたらきを分析することにする。

3. 談話資料における用例数の分布

表に、国立国語研究所（1978）のなかに現れた各形式の用例数の単純な分布を示した。コレ・ホレ・アレの用例数は、後続する拘束形式があるもの（注1にあげたような場合）を除いた数字である。以下に述べるように、談話マーカだけでなく、指示詞と思われる用例も含めてあるが、そのような例は、話し手の記憶のなかにある事物や事態を指示する場合のアレを除けば、わずかである（第1節参照）。アリャとリャの区別は当該資料の作成者の判断による。

表　各談話マーカの用例数の分布

形 式	コレ	コリャ	ホレ	ホリャ[3]	アレ	アリャ	リャ
合 計	1	1	170	24	16	14	19

以上の分布からわかるように、コ系の形式はほとんど用いられることがない。しかも、コレ・コリャの各1例は次のようなもので、対訳によれば、(4) の例は指示代名詞として使われている可能性もある[4]。

(4) ホシテ　ボゴナスデ　コレ　サンナネナヨナエ

（そして　唐竿で　これを　しなければならないのよね：97）。

(5) ヒャグエンサヅナテ　コダエー　ネウヅ　アンナダ　コリャナテ

（百円札なんて　こんなにも　ねうち〔が〕　あるんだ　これはなんて：73）

一方、ホ系・ア系の形式は使用頻度が比較的高い。特にホレについてそれが顕著である。またその用法も、談話マーカであることが多い。

以下本稿では、ホ系（第4節）、ア系（第5節）の形式にしぼって考察をすすめることにする。

4. ホレ・ホリャ

4.1. ホレ

ホレは基本的に、話し手が、聞き手の注意や認識・記憶を喚起（確認）しようとする場合や、聞き手に行為を促す場合に用いられる談話マーカである。機能的には共通語の「ほら」にほぼ相当し[9]、文頭（(6)）、文中（(7)）、文末（(8)）いずれにも現れて、次のように使われる。

(6) a　ホレ、そこにあるじゃないか（認識喚起）

　　b　ホレ、早く食べろ（行動促進）

(7) a　その映画はホレ、前に二人で行ったじゃないか（記憶喚起）

　　b　さっさと服を着てホレ、早く行けってば（行動促進）

(8) a　（ごきぶりが）おまえのところに行ったホレ（注意喚起）

　　b　早く行けホレ（行動促進）

確認要求の文や命令文などと共起し、聞き手がすでに一度は認識している事態、あるいは話し手に指摘されれば聞き手もすぐに認識できる事態について述べることが多い。

ホレにはまた、次のような特徴がある。

(a) ホレは聞き手目当て性をもち、独り言で使われることはない。また、聞き手目当て性をもっていても、基本的に話し手のもつ情報や要求を聞き手に伝える場合に使われるものであり、（確認ではなく）情報を要求する疑問文で用いられることはない。

(9) ＊きのうはホレ、学校に来たホレ？

(10) ＊きのうはホレ、誰が行ったのホレ？

この点でホレは、間投助詞・文末詞ヨと似ているが、ヨは、「話し手が指摘すれば聞き手はすぐに認識できる」といったことを前提としていない点で異なる。たとえば、自分の感情や経験を聞き手に一方的に伝えるような場合には、ヨは適格であるがホレは使えない。

(11) その話を聞くと、僕は彼女がかわいそうで｛ヨ／＊ホレ｝

(12) きのうの夜はどうしてもラーメンが食べたくって｛ヨ／＊ホレ｝

ちなみにヨは、次のように、疑問文と共起することもある。

(13) おまえヨ、きのうヨ、学校に来た？

(b) ホレが文頭や文末にある場合には、それぞれ、それに後続あるいは先行する命題全体が認識喚起等の対象（スコープ）となるが、ホレが文中にある場合には、ホレによって聞き手の認識等を喚起する部分は、文の構文タイプとも連動しつつ、ホレに先行する部分である場合、ホレに後続する部分である場合、ホレをはさんだ前後の部分である場合の、いずれのケースもありうる（［　］内がスコープ。｛　｝は談話的なまとまりを示す）。

(14) A：あのときは伊藤さんだけが行ったんだよね

　　B：違うよ。あのときは［佐藤さんも］ホレ、行ったんだったろう↑

(15) A：あのときはたしか、伊藤さんと斎藤さんの二人がいたんだよね

B：違うよ。あのときはホレ、[佐藤さんも] いたじゃないか

(16) あのときは、{ [佐藤さんが] ホレ、[芋煮を作って]}、{ [斎藤さんが] ホレ、[おでんを作って]} ...

(c) ホレが文中・文末にある場合には、ホレに先行する部分とホレとの間にポーズが置かれない（文頭の場合も含め、ホレのあとにはポーズがある）ことが多い。これは、ホレのスコープがホレに後続する部分にある場合も同様。ただし、ホレの先行部分末尾で一度下がってからホで再び上がることがある。

(d) ホレは、一つの発話のなかに連続して現れて、聞き手の認識や記憶等を喚起しつづけることも多い（例 (2) 参照)。これは、先の表で見たような、ホレの使用頻度の高さを説明するものであるが、より本質的には、話し手が、聞き手と共有している（共有できる）と思っている認識や記憶等を、聞き手にひとつひとつ確認しつつ話を進めていくという、当該方言の談話面での特徴を示すものとして解釈できるのかもしれない[6]。

4.2. ホリャ

一方ホリャ（<ホレ＋ハ）は、ホレがもっている発話内部での分布（文頭・文中・文末）や用法（聞き手の認識・記憶喚起等）を受け継ぎつつも、次のようなハの用法（渋谷 1999 から関連する部分のみを要約）が加わっており、ホレほどの広い用法では使われない。

(17) 話し手が事前に期待や予測・意図をもっていることを前提にして、話し手が新たに認識した、あるいは話し手の目の前で生起した動的事態が、話し手のもっている（いた）その期待や予測・意図に一致しないものであることをマークする。

ホリャの特徴は、以下のようにまとめることができる。

(a) まず分布については、上に述べたように、ホレ同様、文頭・文中・文末いずれでも用いることができる。

(18) a ホリャ、彼女、行ってしまったじゃないか

b 彼女ホリャ、行ってしまったじゃないか

c 彼女、行ってしまったじゃないかホリャ

(b) しかし、(18a) ～ (18c) いずれも、「彼女が行ってしまった」という動的事態が生起したことの認識を聞き手に促している（「ホレ」の役割）だけでなく、当該事態の生起が話し手の期待に反するものであるということをマークしている（「ハ」の役割）点で、ホレが単独で使われた場合とは異なっている。

ホレと対比したときのホリャの用法の特徴を、さらにいくつか確認しておこう。いずれもハの用法が根底でかかわっている。

(c) まず、事態の生起についての話し手の期待といったことと関連せずに、単純に聞き手の認識・記憶等を喚起する場合には、ホレは使うことができるが、ホリャは使えない。

(19) {＊ホリャ／ホレ}、そのときみんなでパーティやったじゃないか

しかもハは、事態のなかでも動的事態の生起に言及するものであるために、次のような状態に言及するホリャの例は、二重に不適格である。

(20) {＊ホリャ／ホレ}、やっぱり白いじゃないか

(d) 関連して、

(21) a　おまえ、合格した {＊ホリャ／ホレ}

b　お前が待っていた人が来た {＊ホリャ／ホレ}

の例のように、話し手が期待している、あるいは、話し手が、動作主体（聞き手）が期待していると想定しているような事態の生起についても同様に、ホリャは使われない。

(22)（なかなか勉強を始めない息子に）ホリャ、花子はもう勉強しているよ

(23)（トイレに行くといいながらなかなか行かない子供に）電車が来たホリャ

のような例は、一見、話し手がその生起を期待している事態についてホリャが使われているように見えるが、この場合の話し手の期待はあくまでも「花子が勉強する前に息子が勉強をはじめること」「電車が来る前に子供がトイレに行くこと」であり、この期待に沿った事態が生起しなかったという点で、例外となるものではない。

(e) 命令文とは共起しない。

(24) a　{＊ホリャ／ホレ} 早く行け

b　早く行け {＊ホリャ／ホレ}

文末詞ハそのものは、

(25) 早く行けハー

のように命令文と共起できるが、その場合には、話し手が、話し手の「もっといてほしい」という本意に反して行くことを促しているという意味になる。ホレは話し手の意図に沿って聞き手の行為を強く促すものであるから命令文と共起しても問題はないが、ホリャの場合は、ホレによって表される行為の強制という発話の意図と、ハによって表される行為強制のためらいという発話の意図が衝突するために、ホリャが不適格になる。

(f) 一方 (c) ～ (e) の例とは逆に、ホリャには、文頭で上昇調（ホが低く、リャが著しく高い）をとって、発話の現場で聞き手の採った、話し手の予想や期待に反した意外な行動のありかたに、聞き手の注意を強く喚起する用法がある。

(26) {ホリャ↑／＊ホレ}、そんなことよく言うよ

この場合ホリャは、すでに聞き手指向であるところに、聞き手指向の上昇調をさらに帯びることによって、単に聞き手の注意を喚起するだけではなく、聞き手の採った行動に反省や変更を促すといった語用論的な意味を添えている。

5. アレ・アリャ・リャ

次に、アレ (5.1)、アリャ・リャ (5.2) の用法を考察する。

5.1. アレ

文頭などにおいて、独立形式[7]として用いられたときの山形市方言のアレには、共通語の「あれ」と同じく、大きくわけて、感動詞と指示詞の２つの用法がある。両者の関係についてはよくわからない。

5.1.1. 感動詞アレ（・アリャ）

感動詞アレは、文頭で上昇調を取って、事態の生起に驚いたこと、あるいはある（予想していなかったあるいは予想に反した）事態が生起する可能性があることにその場で気づいて驚いたことなどを表すものである。この場合のアレは、アリャ（共通語の「ありゃ」も同様）と置き換えても意味は大きく変わらない（詳細は後述。このアレ・アリャの用例は、談話の内容ともかかわって、国立国語研究所 1978 のなかには見出せない）。

(27) {アレ／アリャ} 米がなくなったハー（あれっ／ありゃ、もう米がなくなったよ）

(28) {アレ／アリャ} 雨が降ってきたハー（あれっ／ありゃ、雨が降ってきたよ）

(29) {アレ／アリャ} 太郎は行ったハー（あれっ／ありゃ、太郎は行ってしまったよ）

(30) {アレ／アリャ} 明日は雨だハー（あれっ／ありゃ、明日は雨になるよ）

アレ・アリャに後続する文は、次のように疑問文でもよいが、

(31) {アレ／アリャ} また太郎が来たのか（あれっ／ありゃ、また太郎が来たのか）

(32) {アレ／アリャ} 誰がおれの弁当を食べたんだ（あれっ／ありゃ、誰がおれの弁当を食べたんだ）

(33) のように既定の事実を述べる平叙文や、(34) のように聞き手の行為を促すべく事前に意図されてから発される命令文などとは共起しない。

(33) {＊アレ／＊アリャ} きのうは一日中雨だった

(34) {＊アレ／＊アリャ} 勉強しろ

なお、感動詞としてのアレとアリャの違いについては、アリャのほうが当該方言では伝統的な方言であると思われる以外には、現段階では見出せていない。

(35) {アレ／？アリャ} めずらしい人が来た（あれっ／ありゃ、めずらしい人が来た）

(36) {アレ／？アリャ} もしかしたら明日太郎が来るかもしれないな（あれっ／ありゃ、もしかしたら明日太郎が来るかもしれないな）

のような、「話し手の期待に反する事態の生起」といった特徴をもたない例では、アリャがやや不自然になるようにも思われるが、この判断が正しいとすれば、アレとアリャの間には、ホレとホリャの違いと同じような、ハの抱合の有無といったことで説明できる違いがあることになる。しかし 5.2 に述べるアリャの一部の用法では、アリャはアレと対立しない。当該方言におけるアリャがアレ＋ハに起源をもつものかどうかについては、ここでは判断を保留する。

5.1.2. 指示詞アレ

次に、アレにはまた、一部文の内部での分布（他の要素との共起のありかた）に制限があるものの[11]、指示詞としての用法もある。

(37) ユギ　フッド　アレダッス　シャキショーシューダ　ワラスゴドヅダナ　オドゴデモ　オナ〈ゴデモ〉。

（雪〔が〕降ると　あれだし　百姓衆達〔は〕藁仕事だよな　男でも　女でも：19）

(38) アエヅ　アレダベ　ナベ　アロエ　スッサゲ　ホレ。

（あれは　あれだろう　鍋　洗い〔を〕　するから　ほら：29）

(39) フミヨッサェンナ　モモヌギダテ　アレ　コッツノ　ホ　シカゲノ　ホ　ナエダガ　シェー　〈ワレ〉　ミダエダダレ　オガラネクテ。

（文義さん家の　桃の木だって　あれ　こっちの　方　日陰の　方〔は〕　なんだか勢が　悪い　みたいだものね　大きくならなくって：109）

のように、共通語と同じく、話し手の頭のなかにすでに蓄えられて存在する情報を指し示す、あるいはそれを表現することばを検索しているときに、cataphoric に使われることがある。この場合、話し手だけがその情報をもっているというだけでなく、

(40) あの男も結局、アレだったんじゃないか。

のように、聞き手も同じ経験や知識を共有し、話し手が指示対象を述べなくても聞き手がそれを埋めることができるものと期待されている場合がある点など、4.1 で述べた談話マーカのホレの用法（聞き手は気づいていないという前提で使用）と対立する。

なお、聞き手目当て性という特徴は、アレの場合、ホレと異なって必須のものではなく、独り言のなかで使ってもよい。

(41) あいつ、またアレだろうかな、東京に行ったのかな

一方、指示詞としてのアレは、文中や文末においても、先行形式との間にほとんどポーズをおかずに、なかば従属形式となって使われることがある。この場合のアレは、話し手が新たに導入した話の内容を、話し手がかつて経験したことや、会話のなかですでに聞き手との共有情報になっていることがらにリンクするという、情報のネットワークを構成する働きを果たしているように思われる。たとえば (42) の例では、「当時はバケツがなかった」という新たな情報はそれをめぐる話し手の昔の経験全体に結びつけて述べられている。

(42) テオゲ　シテ　アダーナ　オモダエナ。　バゲヅナテ　ナエケッスアレ　テオゲデ。

（手桶　そして　あんなに　重たいの　バケツなんて　なかったしね　手桶で：34）

同様に次の例でも、話題となっている事態について推測される理由（「ガンヅエダンダベ」「アベハー　アベハーテユタンダベ」）を述べ、それが当の事態に関連づけられるべきものであることをアレでマークしているのである。

(43) ドエット　コダア　モカエタ　アエヅ　ンナクテ　ホレ　ヅブンガハ　ガンヅ

エダンダベ アレ。ンゴガンナグ ナタナ。ンダハゲ アベハー アベハーテ ユタンダベ アレー。

（ばたりと こんなに 倒れた あれじゃ なくて ほら 自分が 気付いたんだろう あれ 動けなく なったのを。だから 帰ろう 帰ろうって 言ったんだろう あれ：51）

なお（43）のようなアレは、ベが疑問文の音調をとり、それにアレが低くつくという音調をとるので、アレが十分に従属形式化しているとはまだいいがたい[8]。

5.2. アリャ・リャ

次に、アリャには、5.1.1 で述べた感動詞としての用法のほかに、それ自身が全体で（アリャという形で）指示詞として使われるわけではないが、対話のなかで聞き手の記憶を喚起する場合に現れる（＝独り言では使われない）、次のような指示的な用法がある（この用法はアレにはない）。5.1.1 で述べた感動詞としてのアリャ（２拍）では２拍目が急激に上昇するのに対して、この場合のアリャ（長呼されて３拍であることが多い）は、リャで一度上昇し、その後下降する。

（44）アリャー、みんなで行ったじゃないか（ほら、みんなで行ったじゃないか）

（45）アリャ トヨクニダノ カメノオダノ テユナ アエヅ ンマエケヅナエ

（あれ 豊国だの 亀の尾だの っていうの あれは 旨かったよねえ：96）

このアリャと、同じく聞き手の記憶を喚起するホレの違いは、アリャが遠い過去のことに言及するのに対して、ホレにはそのような制限がないといったことにある。したがって、遠い過去のことについてはアリャ・ホレいずれも使えるが、最近のできごとについてはアリャは使えない。

（46）{アリャー／ホレ} むかしみんなで松島に行ったじゃないか

（47）{＊アリャー／ホレ} きのう食べたじゃないか

ちなみにアリャは、聞き手の「記憶」を喚起するという用法はもつが、ホレ・ホリャがもつ聞き手が気づいていない事態に聞き手の「注意」を喚起するといった用法はもっていない。（48）のアリャは、発見の驚きを表すものとしか解釈できない。

（48）{ホレ／ホリャ／＃アリャ}、彼女はもう行く用意をしているよ

アリャはあくまでも、話し手と聞き手の「共有する遠い記憶」を前提として用いられる用法の限られた形式である。

一方、文節末や文末に（ポーズをおかずに）付加し、従属形式化（間投助詞・文末詞化）しているアリャ（さらにリャ[9]）は、やはり、感動詞としての用法に連続するものと、指示詞としての用法につながるものの、２つがある。

まず、感動詞に対応するものとして、国立国語研究所（1978）には１例も現れなかったものの、（ア）リャが、（文頭のアリャと呼応しつつ）文末（文中というケースはない）で

用いられ、驚きを表すことがある。アレにはこの用法はない[10]。

(49) {アリャー／アレ}、この子、三つも肉まん食べた {リャー／＊アレ}

(50) (近所の女の子がランドセルをしょって出かけるのをはじめて見て)あそこの娘、今年もう小学生だ {リャー／＊アレ}

一方指示詞に対応する用法としては、次のようなものがある。

(51) 〈スブ　ヌゲデナェ〉。ホノママ　キッド　アリャー　アガグ　ナテ　ミンツァ　ツケネド　アノ　ミゴノ　スンブデヨ　アガグ　ナンナヨネハ。
(渋〔を〕　抜いてな　そのままで　着ると　あれ　赤く　なって　水に　浸けないと　あの　藁しべの　渋でよ　赤く　なるのよなあ：27)

(52) シェンニ　ホリャ　ミナ　クサヤネダケハゲテ　オランダモ　アギー　スゴド　スマウド　リヤー　ノーカリジャ　〈エッタヅー〉。(C　〈ノーカリガー〉)　ンー　ヨース　アリャー。(C　ンー)
(昔は　ほら　みんな　草屋根だったから　俺たちも　秋〔に〕　仕事〔を〕　終えると　あれ　萱野刈りには　行ったなあ。(C　萱野刈りか)　んー　葦を　ほら　(C　んー)：53)

いずれも昔の習慣などについて、聞き手の記憶を喚起すべく用いられたもので、(46) や (47) のような、文頭で用いられた記憶喚起のアリャの用法と同じである。

6. まとめ

以上、本稿では、山形市方言に見られる談話マーカ「ホレ・ホリャ」「アレ・アリャ・リャ」を取り上げて、その談話的な機能を分析することを試みた。結果をまとめると、次のようになる。

(a) 山形市方言には、一種の談話マーカとして、ホレ・ホリャ、アレ・アリャ（＞リャ）といった形式がある。リャ以外は文頭・文中・文末いずれにも現れる。リャは文頭以外に現れる。

(b) ホレとホリャは、話し手が聞き手の注意や認識・記憶を喚起しようとする場合や、聞き手に行為を促す場合に用いられる。

(c) 独立形式のアレは、事態の生起に対する驚きを表す場合と、指示詞として話し手の記憶や聞き手との共有情報を指し示す場合がある。一方独立形式のアリャには、前者の用法はあるが、後者の用法はない。ただし聞き手の記憶を喚起するために、指示的に使われる場合がある。

(d) 従属形式としてのアレ・アリャ（さらにリャ）は、基本的に、独立形式のアレ・アリャの用法を引き継いでいる。

(e) ホレと指示的に使われた場合のアレの違いについては、ホレが、聞き手が（話し手と経験を共有していても）気づいていないことに注意を求める形式であるのに対して、ア

レは、話し手のみの経験、あるいは話し手と聞き手が共有している経験や知識を前提として指し示すものである。

(f) ホリャと指示的なアリャについても、同様のことが言える。

(g) ホレとホリャの間には、ホリャがハを抱合しているといった意味・機能上の違いが観察されるが、アレとアリャの間にはそのような違いはあまり観察されない。

その他、ホレ・ホリャ、アレ・(ア) リャいずれも、独立形式として用いられる場合と、文中や文末で従属形式として用いられる場合とで、文法化の度合いによってさまざまな用法の違いが予想されるところであるが、現段階ではまだ十分に解明できていない。今後の検討が必要なところである。

【注】

* 本稿は、平成１３年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)、研究課題番号 10410097)「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」(研究代表者　大西拓一郎）によるものである。

1) 国立国語研究所（1978）では、コレモ（これも）・コレグライ（これぐらい）：ホレガラ（それから）：アレシテ（あれして）・アレタゲ（あれだけ（言ったのに））・アレダゲ（あれだけ）・アレダテ（あれだって）・アレダト（あれだと）・アレナテ（あれなんて）など、接続詞の一部としてや、副助詞や一部の格助詞が後接した場合など、限られた環境においてのみ、コレ・ホレ・アレが使われている。

○ アエヅモー　<u>アレダケデ</u>

（あれも　あれだったろう：22）

2) 先に述べたように、当該方言では、コレ・ホレ・アレ・ドレはほとんど使われることがない。それと関連して、コレ・ホレ・アレ＋取り立て助詞ハが融合した、

○ a　#コリャーイー（これはいい）

c　#ホリャー困ッタ（それは困った）

b　#アリャナンダ（あれは何だ）

なども使われることがなく、

○ a　コイヅ（ワ）いい

b　ホイヅ（ワ）困った

c　アイヅ何だ

など、コイヅ・ホイヅ・アイヅが使われるのが普通である。このこと、および4.2で述べるようにホリャが文末詞ハの意味を含んでいることから、本稿では、コリャ・ホリャ・アリャの起源をコレ・ホレ・アレ＋取り立て助詞ハには求めていない。しかし、アレとアリャの意味の対立は、文末詞ハの有無の違いには還元できない場合がある（5.1.1、5.2）ということもあり、なお検討が必要である。

3) ホレハ（[horeha] と発音する）・ホレァと文字化された形式を含む。

4)　例（5）の「コリャ」の対訳にも指示代名詞「これ」＋取り立て助詞「は」が与えられているが、筆者の内省では、むしろ談話マーカとして解釈するほうが自然である。

5)　当該方言では「ほら」は使われない。山形市方言のホレと共通語の「ほら」の間には、今のところ、文末に現れるか否かといった分布上の違いぐらいしか見出せておらず、ホレが指示詞に起源をもつのではなく、「ほら」が何らかの理由によって指示詞のパラダイムに取り込まれた可能性があることも、現段階では否定することができない。

6)　共通語でも、談話のなかでソ系が多く使われることについては、堀口（1978）などにも指摘がある。ただし、山形市方言では、ホレ・ホリャの談話的機能（聞き手の記憶喚起等、第4節で分析）を考慮すると、「対話の場において、話し手が聞き手の存在を顧慮して自己抑制するところから」多用されるとは思えないところがある。なお、「聞き手に確認する」という点ではホレは共通語の間投助詞ネに近いが（当該方言に間投助詞ネはない）、共通語のネが「きのうね、僕ね、偶然道端で太郎に会ってね」のように聞き手に一方的に情報を伝えるときにも使えるのに対してホレは使えないといった違いがある。

7)　本節でいう「独立形式」「従属形式」とは、ポーズの有無、アクセント単位の数などの基準は考えられるものの、連続的であり、必ずしも明確に区別できるものではない。

8)　山形市方言には、アレに関して、

　　○ そしてナレ、その時ナレ、...

などのようなナレという形式が談話のなかで用いられることがあるが、これは、間投助詞ナ＋アレの融合形（アレが従属形式化している例）かもしれない。まだ十分な分析を行っていないので、今回は分析から省いた。3.の用例数分布一覧にも入れていない。

9)　筆者の体系には、文節末、文末に現れるアリャはなく、リャだけが使われる。

10)　なぜアレにこの用法がないのかということについては、アレが新しい形式だからなのか（5.1.1））、ハが抱合されていることによるものなのか、あるいはそのほかの理由によることなのか、現時点では判断できない。

【参考文献】

国立国語研究所（1978）『方言談話資料(1) －山形・群馬・長野－』秀英出版

渋谷勝己（1999）「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1

――――（2001）「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3

堀口和吉（1978）「指示詞の表現性」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学（金水敏・田窪行則編 1992 『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房に再録）

しぶや　かつみ（大阪大学大学院）

sbj@let.osaka-u.ac.jp